

国

語

(
解答
番号

1

～

44

)

I 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。解答番号は、

1

5

26

。

現在のAI技術の形態はヒカクテキ安定化¹しており、学生を含め、AI研究に携わる人々は増加の^Aアをたどっている。そのため、AI研究者にも多様な人がいる。構成論的アプローチを究極的な目的として考える人もいれば、単純に精度向上を狙う研究者もいる。

ここで1つ考えてみたいのは、人工物として実現された「知能」が構成論的アプローチ的な意味で人間や実際の自然現象を表すことができるか、ということである。もちろん、AI技術の中でよく話題になるデータイーブラーニングも人間の脳にインスパイアされた技術であって、現代の技術が構成論的アプローチの恩恵を受けていることは間違いない。深層学習も完全に脳をシミュレートしたり模倣したりする域には達していない(中島 2015 p.87)が、それでも人間の脳や自然物に迫っていくために人工物をつくるということは技術的には一定の効果がある。

一方で、人間の知能、ないし自然を探索しようとする従来の科学観からすると、構成論的アプローチの見方は特殊である。^(注2) フランシス・ベーコンは自然を理解するためには思考を巡らせるだけでなく、実験などを用いて身体や道具を用いて自然をある程度拘束することが必要であると説いた。その後、観測や計測機器を用いて自然への介入が進められ、自然現象は次第に数値データに還元されて分析可能となり、現代の科学研究のさまざまなキバン²がつくられた。

構成論的アプローチはこの方向とは異なるアプローチである。構成論的アプローチが行っているのは、人間が行うさまざまなタスクを高い成功率でクリアする技術をつくり、そのタスクがうまくこなされるのであればその仕組みが人間の知能に近いものである、と仮定するということだ。なぜそれがうまくいったのかの分析は実際にうまくいった後で行われる。直接に自然現象を解き明かすのではなく自分たちでなぜかうまくいく「何か」をつくる点で構成論的アプローチは通常自然科学とは方向が異なる。しかも、何かを実現するための方法や機構は一通りではないため、あるタスクを人間のようにこなしたとしても、その機械の内部の機構が必ずしも人間と同じようになっているという保証はない。

A、構成論的アプローチを通じてでき上がっていく知的なエージェントも、やはり、もちろん人間とは異なる知性を持った存在であるということである。これがここで注意したいことだ。

今、筆者が言おうとしていることを次のような物語のアナロジーとして表現したい。ある時、地球語を話さない宇宙人が突然やってきて、特殊な仕事をものすごく高速で処理してくれるようになったとする。その仕事は、大量の画像から特定の対象を認識したり、コキヤクが持つ購買データをもとに広告を出したり、家を設計して材料を調達して建てたりといった、多様で人間の役に立つものだ。宇宙人は嬉々としてそうした仕事をこなし、人間社会に

a
いく。

しかし、画像の中から何を認識すれば、どういう広告を出せば、どこにどういう材料を使って家を建てれば、人間の社会にとつていいものができるか、環境に配慮したものができるかなどはその宇宙人自身は定義しない。なぜなら、彼らは人間の価値観を持たないからだ。仮に何らかの価値観、評価基準を持つように頼んだとしても、その結果は人間が

b
ものになって

しまう。例えば、家を建てる仕事を好む宇宙人に、「I」とお願いしても、木を無限に伐採することが環境に悪いことだと宇宙人たちは思わないかもしれない。そうなれば、木を一定期間内に一定以上切らないようにしてほしいと人間が

I
お願いするしかない。

この話の中で宇宙人として扱っているのはもちろんAIのことだ。つまり、究極的に多様なタスクをこなせる自律的なAIができたとしても、人間と同様に考え行動するという保証はないということである。自分の意志を持ち、人に言われなくても動く究極のAIが誕生したとしても、人間と価値観を

ウ
し、人間のように思考し、人間のような答えを返すわけではないかもしれない。それはつまりAIが人間そのものではないという(とても当たり前な)ことを意味する。AI技術は人間並みかそれ以上の知能を目標としているが、それは人間と協調する知能をつくることとはイコールではない。

AI技術は人間の知能にインスパイアされてはいても現状では人間とは異なる形式の知能をつくり出す営為である。AI技術は人間の他者であり、AI技術を人間社会の中で使うには人間の他者としてのテクノロジーである人工知能を人間の社会に合わせる必要が生じる。

究極的にAI自体が人間の他者である、ということ述べた。次に考えたいのは、究極的なAIができる以前にAIの専門家ではない人々(非専門家)にとっては現代のAI技術も自分の c ところで作られる他者による技術だ、という点だ。普段AIの専門家とふれあわない非専門家にとってAI技術はどこからともなく現れ、新聞等で存在を知らされる謎のテクノロジである。AIの専門家という他者集団によってつくり出されるAI技術は、非専門家たちにとって自分たちの考えが入った技術ではないという意味での他者性を帯びている。

専門家と非専門家はなぜ他者集団なのだろうか。AIの専門家集団、つまりAIの研究者は大学やその他の研究機関に所属し、日々AIの技術開発に努めている。彼・彼女らは大学院をシユウリヨウし、⁴きわめて高度な専門性を持っている。高度な専門性を持つということは特定の学問領域の知識を深く知っている、ということの意味する。しかし、現代では、学問は多様に細分化され、学問が外部の価値観に鈍感になり狭い価値基準にとらわれていくサイロ化が起こっている。これは、研究者の能力は出版された論文などの目に見える業績で測られるため、論文が掲載される論文誌や学会の作法や採択基準(ダトウセイ境界)⁵を自らの判断基準として意識的・無意識的に内化していくためである(藤垣 2005, p.36)。したがって、研究という営為だけを考えると専門家は非専門家の価値基準に目を向ける必要がなく、また非専門家も学問領域内部のことは分からないので、そこで断絶が起き、互いが互いの他者となっている。

このことはAI技術自身にとっても技術の実用性という意味での問題を孕^{はら}んでいる。AI技術はサイロ化した学問の評価基準のもとにアップデートされていく。その1つの評価基準がベンチマークデータといわれる公開されたデータセットを用いて測られる予測精度が向上したかどうかということである。この場合、ベンチマークデータはAI研究における一種の統制環境のように働く。しかし、統制環境で得られた結果が実環境のデータで成り立つとは限らない。つまり、最新の技術がそのまま各ドメインのタスクに当てはまるとは必ずしも限らないのである。そのために非常に定型的な条件では最もいい精度が出なかったとしても、現実の汚い状況で使える簡素で古典的な方法が好まれる場合もある。^Cこれは工学的な研究が社会に接続しなくなっていくことにつながり、非常に問題である。

B、AI技術を実環境で使えるものにしていくためには何が必要なのだろうか。つまるところ、AIの専門家だけでなく、技術を使う実践領域で日々仕事を行っているAIの非専門家(であると同時に実践領域の専門家)の知見を得ることが必要である。

非専門家との対話は純粋なAI技術の専門家にとっては論文生産のために効率が悪く感じられる場合もある。そのため、研究者の中には、手法は自分たちで考え、利用法は事後的に企業に問う、という方法をとる人もいる。これは、研究から実践という(注6)スペクトラムを考えた時にはきわめて自然なことではある。しかし、**II** 環境にそのAI技術の知見を合わせるためには、その実践領域の専門家との協業が不可欠である。

C、非専門家もAI技術を **d** ものと思ってしまうことを避けた方がいい。テクノロジーといわれると「何かよく分からないもの」という印象があるかもしれないが、人間がこしらえたものには変わらないので、ある程度まで理解することはできる。**D**、実践の場にどんな技術を受け入れるかの決定権を持っているのは常に技術の非専門家である。したがって、AIの非専門家であることが人々を **E** 化することはない。技術と日常的に相互作用することになる技術の非専門家がその技術をどう認識するかが、その技術が受け入れられるかを決めるのだ。

言ってしまうと、AIの専門家は技術の社会受容を議論する多様な社会集団の1つに過ぎない。いろいろな専門知識や現場的な専門性がある中で、技術がつくり出す今後の社会を専門家が単独で決めることは本質的にはできないはずである。

それにもかかわらず、研究者以外の立場の人のことには **e** ような活動はいくつかの例外を除いて少なくとも日本国内ではあまり行われていない。

Dでは、非専門家と専門家はどのように関わりあい、AIの社会受容についての議論を重ねていけばいいのだろうか。専門家は、技術のポテンシャルを中心に、研究によって開ける可能性を考えながら工学研究を進めている。これは技術自体の進展という目的、また要素技術への深い理解を持った人々が世界にとって必要だという観点から正しいことである。しかし、こうした研究だけでは、AI技術が広がる社会の未来を予想し提言を行うためには不十分である。

非専門家と専門家間の議論を考えた時に、専門家がなすべきことは自らが与えられる情報の限界を認識しながら、社会に対して条件付きで信頼できる情報ソースを与え続けることである。そして、非専門家は実践的な取り組みから得られた知見を共有する必要がある。専門家と非専門家は、⁶ソウホウ⁶が与える知識の質が異なることを認識しつつ、フラットな、対等な関係として技術の実践的な可能性と問題点、解決方法等について議論を進めるべきである。

（中尾悠里『AIと人間のジレンマ ヒトと社会を考えるAI時代の技術論』より）

（注1） デイープラーニング——深層学習とも言われる、コンピュータによる機械学習。人間の脳神経回路を模している。

（注2） フランシス・ベーコン——イギリスの哲学者、政治家（一五六一―一六二六）。

（注3） エージェント——代理人。

（注4） アナロジ——類推。

（注5） ドメイン——領域。

（注6） スペクトラム——連続していること。

問1

線1～6を漢字で書いたときに用いる字として最も適当なものを、次の各群の①～⑥のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、1

1	ヒカクテキ	①	格	②	核	③	較	④	殻	⑤	隔	⑥	拡
2	キバン	①	盤	②	晩	③	板	④	伴	⑤	蛮	⑥	万
3	コキヤク	①	故	②	顧	③	庫	④	孤	⑤	呼	⑥	鼓
4	シユウリヨウ	①	終	②	衆	③	秀	④	就	⑤	修	⑥	宗
5	ダトウセイ	①	打	②	駄	③	墮	④	唾	⑤	蛇	⑥	妥
6	ソウホウ	①	総	②	奏	③	走	④	双	⑤	曾	⑥	操

問2

ア～エに入る語句として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号を二回以上用いてはならない。もし用いた場合は、同じ番号の解答をすべて誤答とする。

解答番号は、ア

- ① 具体 ② 抽象 ③ 共有 ④ 一途 ⑤ 無力 ⑥ 定義

問3 ―線A「構成論的アプローチ」とはどのような手法か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、11。

- ① 自然の探求のために自然を数値データに還元していく通常の自然科学の方法とは異なり、人間の知能の機構の再現のために人間のタスクを遂行する技術をつくり、検証するという手法。
- ② 自然をデータ化することで人間の生活の利便性向上を目指す現代の科学研究とは異なり、人間のタスクを高確率でこなす技術をつくった後で、その技術の機構の分析をするという手法。
- ③ 自然を道具を使って拘束し、直接に観察をして解き明かそうとする従来の科学の方法とは違い、人間のタスクをこなす機構を複数通りつくり、その後人間の知能に近い仕組みを選別するという手法。
- ④ 道具を用いて観測することにより自然現象を直接分析する通常の自然科学的な手法とは違い、まずあるタスクを人間と同様にこなせる技術をつくり、その後でなぜ成功したのかを分析するという手法。
- ⑤ 自然現象を分析し、人間がタスクを行う仕組みを解き明かそうとする現代の科学研究とは異なり、人間の知能を直接に分析し、人間のタスクを遂行する技術をつくることを目指すという手法。

問4

A　　D　に入る語句として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号を二回以上用いてはならない。もし用いた場合は、同じ番号の解答をすべて誤答とする。

- 解答番号は、A　12　B　13　C　14　D　15。
- ① 例えば
 - ② では
 - ③ また
 - ④ つまり
 - ⑤ 逆に
 - ⑥ なぜなら

問5

なさい。解答番号は、a

a

e

に入る語句として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び

16

b

17

c

18

d

19

e

20

a ① 溶け込んで

② 買いかぶられて

③ 水を差して

④ 依存して

⑤ あげつられて

b ① 手に付かない

② 引くに引けない

③ 示しが付かない

④ 頭が上がらない

⑤ 思いもよらない

c ① 気が置けぬ

② あずかり知らぬ

③ 胸に迫る

④ 造詣が深い

⑤ 見るに堪えぬ

d ① 末恐ろしい

② 卑近な

③ 縁遠い

④ しのを削る

⑤ 生半可な

e ① 耳をそばだてる

② 異を唱える

③ ごまをする

④ 思いをはせる

⑤ にらみをきかせる

問6

I

に入る言葉として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

21

。

① 家を建てないでくれ

② 木を切らないでくれ

③ 環境に配慮してくれ

④ もっと大きな家を建ててくれ

⑤ 木を使わずに家を建ててくれ

問7 ―線B「AI技術を人間社会の中で使うには人間の他者としてのテクノロジーである人工知能を人間の社会に合わせて

変えていく必要が生じる」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選

びなさい。解答番号は、

22

- ① 優れたAIは自律的にタスクを淡々とこなすが、人間との協働のために必要不可欠である言語を持たないから。
- ② 自律的なAIは人間と同じ価値観を有するものの社会性に欠け、そのままでは人間との協働が困難であるから。
- ③ 多様なタスクをこなす自律的なAIは人間以上の知能を持つという、誤った認識が社会にはびこってしまうから。
- ④ AIは人間とは異なる知能である以上、別の知能を持つ人間に対しては非協力的であることが想定されるから。
- ⑤ AIが持つ知性はどれほど優れていても人間とは異なるもので、人間との協調が約束されたものではないから。

問8 ―線C「これ」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びな

さい。解答番号は、

23

① 最新の技術は統制環境でのみ実用性が保証されるため、実環境で技術を使う人にとっては無用の技術となっているこ

と。

- ② 定型的な状況下で有用とされた新技術が実践で有用かどうかは不明瞭なため、実践では利用されない場合があること。
- ③ 技術を開発する専門家と現場で技術を使用する実践の専門家が、想定する環境の違いから対立し合っていること。
- ④ 技術を開発する専門家は実践領域には疎いために、現実とは異なる仮の条件を設定し技術の評価をしていること。
- ⑤ どんな状況下でも実用性が保証された技術が開発されたとしても、実践の間では古典的な方法が使われ続けること。

問
9

Ⅱ

に入る言葉として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

24

。

- ① 実践の不定形な
- ② 現実の一義的な
- ③ 仮想の不安定な
- ④ 工学的な研究の
- ⑤ 専門家の理想の

問10

——線D「非専門家と専門家はどのように関わりあい、AIの社会受容についての議論を重ねていけばいいのだろうか」とあるが、筆者は「専門家」のあり方をどのように述べているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

25。

- ① 専門家は日々技術と相互に作用しあって研究を進めているが、技術の社会受容を決定できるのはあくまで非専門家であるため、専門家は研究から得られた信頼に足る情報を社会に対して発信し続けることに専心すべきだ。
- ② 専門家を取り巻くサイロ化への対策として、専門家は技術の発展を目的に研究をすることに加え、社会に対して条件付きで信頼できる情報を共有し続け、非専門家と協業し、技術的な面でのさらなる発展の可能性を探るべきだ。
- ③ 専門家は非専門家に迎合することを拒んでいるが、非専門家は技術の実践領域の専門家であるという側面を認識し、技術研究の結果得られた情報を社会に共有する営為に加え、非専門家が技術の実践の結果得た知見を吸収すべきだ。
- ④ 専門家は現状狭い価値基準にとらわれているが、そもそも専門家集団が単独で社会の行く先を決めることはできないため、技術研究をし、社会に対して情報提供をする一方、非専門家と協業し技術の実践領域の知見を得るよう努めるべきだ。
- ⑤ 専門家は技術そのものの発展を目指し技術の可能性を追求する社会集団であるが、その営為だけでは技術の社会受容についての議論はできないため、今後を見すえて開発した技術の実践的な使用可能性についての研究も行うべきだ。

問11

本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

26

。

- ① 現状その段階には達していないが、A I技術は究極的には人間と完全に協調できる知能を作ること为目标としている。
- ② 非専門家にとって、A I技術は専門的な理解が全くできない技術の結晶であるため、他者性を帯びていると言える。
- ③ 研究者が能力を認められるためには雑誌等に論文が採択される必要があるということが、学問のサイロ化の背景にある。
- ④ 技術を提供した後でその利用のされ方を問うという方法は、対話的であり専門家と非専門家の理想の関わり方である。
- ⑤ 専門家と非専門家は、互いが有する技術力に差があることを理解したうえで、技術の諸問題について議論をするべきだ。

II 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。解答番号は、

27

44

美作国英多郡の部に、おほやけの鉄を取る山あり。帝姫阿倍の天皇の御代に、その国の司、役夫十人を召し上げて、鉄山に入れ、穴に入れて鉄を掘り取らしめき。時に山の穴の口、たちまちに崩れふたがり動く。役夫驚き恐りて、穴より競ひ出で、九人わづかに出づ。一人のみ後れて出づるあり。その穴の口ふたがり合ひ留まる。国の司上下、圧されて死にたりと思ふが故に、憂へ悲しぶ。妻子泣き憂へて、観音の像を図絵し、経を写し福力を追贈して、七日経ることすでに終はりぬ。時に独り穴の裏に居て思はく、「吾、先の日法花大乘を写し奉らむと願ひて、いまだ写し終はらず。我が命を全くし給はば、我、必ず果たし奉らむ」と思ふ。暗き穴に居て、憂へ悲しぶ。ひととなりし時より今日に至るまで、この悲しびに過ぎたることなし。その穴の戸の隙、指刺すばかり開き、日の光及び至りぬ。そゑに一人の沙弥あり。隙より入り来たり、鉢に饌食を盛りて、以て与へて語らく、「汝の妻子、我に飲食を供へ、吾を雇ひて勧め救はしむ。汝また泣き憂ふるが故に、我来たる」といふ。隙より出で去る。去りて後久しくあらずして、居たる頂に当たりて、穴開け通り、日の光照り及ぶ。穴の開け通ること、広さ方二尺余、高さ五丈ばかりなり。時に三十余人、葛を取りて山に入り、穴のほとりより往く。穴の底の人、人影を見て叫びて言はく、「我が手を取れ」と云ふ。山人ほのかに聞くに、蚊の音のごとし。すなはち聞きて怪しび、葛を取り石をつなぎ、底に下して戒む。底の人取りて引く。明らかに人なりと知りぬ。葛を結びて縄とし、葛を編みて籠とし、四つの葛の縄を以て籠の四角につなぎ、わかつりを穴の門に立てて、ややくに穴の底に下す。底の人籠に乗りて、もちてわかつりを引き上げ、持ちて親の家に送りぬ。親属見て、哀しび喜ぶることたぐひなし。国の司問ひて云はく、「汝、いかなる善をかなせる」といふ。答へていふこと上のごとし。国の司これを聞きて大にあらはれび、知識をひきゐて、相助けて法花経を造り、供養することすでに終はりぬ。これすなはち法花経の神力にして、観音の最勝なり。更に疑ふことなかれ。

(『日本霊異記』より)

- (注1) 福力を追贈して——死者の冥福を祈って。
- (注2) 法花大乘——法華經のこと。後の「法花經」も同じ。
- (注3) ひととなりし時——ここでは、物心がついたとき、という意味。
- (注4) そゑに——それだから。
- (注5) 沙弥——出家したばかりの僧。
- (注6) 饌食——ごちそう。
- (注7) 居たる頂——座っている人の頭。
- (注8) 二尺余——一尺は約三十・三センチメートル。あとの「丈」は「尺」の十倍。
- (注9) わかつり——滑車。
- (注10) ややくに——少しずつ。
- (注11) 親属——親族。
- (注12) 知識——高僧。
- (注13) 鼯鼠——庇護^{ひこ}して、力を貸すこと。

問1

~~~~線ア～オの本文における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、ア

27

イ

28

ウ

29

エ

30

オ

31

。

ア「おほやけの」

① 官営の

② 大規模な

③ 一般的な

④ 個人の

⑤ 一時の

イ「召し上げて」

① 没収して

② 追い出して

③ 呼び集めて

④ 報酬を与えて

⑤ 食事をさせて

ウ「たちまちに」

① 依然として

② 悠然と

③ 雑然と

④ 自然に

⑤ 突然に

エ「たぐひなし」

① 想像できない

② 並一通りでない

③ 一切ない

④ 思い出せない

⑤ 優れていない

オ「あはれび」

① かわいそうに思い

② 残念に思い

③ くやしがり

④ 心を動かされ

⑤ 趣を感じ

問2

線いゝはの解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、い

32

ろ

33

は

34

。

い「鉄を掘り取らしめき」

- ① 取った鉄を占有した
- ② 鉄を採掘させた
- ③ 鉄を取って閉鎖した
- ④ 鉄を掘って持って帰らせた
- ⑤ 鉄を盗掘された

ろ「我が命を全くし給はば」

- ① 私の命を無事に救ってくださるならば
- ② 私の命をちゃんと助けてくださったので
- ③ 私の命をないがしろになさるならば
- ④ 私の命を完璧なものにしてくださいと
- ⑤ 私の命を延ばしてくださったので

は「更に疑ふことなかれ」

- ① 改めて疑うことはない
- ② その上疑うことはないだろう
- ③ 決して疑ってはならない
- ④ まさか疑うはずはあるまい
- ⑤ どうして疑うことがあろうか

問3 〰線 a ～ e の動詞の活用の種類を、次の ① ～ ⑨ のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、a 35 b 36 c 37 d 38 e 39。

- ① 四段活用
- ② 上二段活用
- ③ 下一段活用
- ④ 上二段活用
- ⑤ 下二段活用
- ⑥ カ行変格活用
- ⑦ ナ行変格活用
- ⑧ サ行変格活用
- ⑨ ラ行変格活用

問4 — 線 A 「一人の沙弥あり」とあるが、沙弥が現れたのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選びなさい。解答番号は、40。

- ① 役夫の妻子が夫は死んだものと思って冥福を祈ると、役夫は妻子に会えずに死ぬことを覚悟するようになったから。
- ② 役夫の妻子が初七日の法要を終え、夫の死を乗り越えようとしているのに、役夫がいつまでも悲しんでいるから。
- ③ 役夫の妻子が食べ物供えて、夫の無事を必死に願っているのに、役夫が希望を見出<sup>みいだ</sup>せずに絶望しているから。
- ④ 役夫の妻子が観音に食べ物供えて役夫の救済を願っているなか、役夫は一人穴の中で泣いて悲しんでいたから。
- ⑤ 役夫の妻子が夫の食べ物を用意して観音に夫の救出を願い、また、役夫も妻子との再会を願っていたから。

問5 — 線B「葛を取り石をつなぎ、底に下して戒む」とあるが、なぜこのようなことをしたのか。その説明として最も適当

なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、41。

- ① 穴の底からかすかに聞こえる声の正体が本当に人なのかを確かめるため。
- ② 穴の底にいる人に下ろした葛をつかんでもらい、引き上げて救い出すため。
- ③ 穴の底から聞こえる不気味な声の主に、石をぶつけて退治するため。
- ④ 穴の底にいる人の声が聞き取れないので、大きな声を出すよう促すため。
- ⑤ 穴の底にいる人が鉾山の天井に穴を空けた方法を実際に見せてもらうため。

問6 — 線C「答へていふこと上のごとし」とあるが、具体的にはどのようなことを答えたのか。その説明として最も適当な

ものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、42。

- ① 鉄を掘っていたら、急に鉾山の出口が崩れて出られなくなったこと。
- ② 観音の図像を飾り、初七日の法要を厳粛に執り行ったこと。
- ③ 穴の中で失意に暮れ、妻子に会えないつらさで泣いていたこと。
- ④ まだ完成していない法華経の写経を、完成させると誓ったこと。
- ⑤ 観音の神通力で空いた穴を通り抜けて、出ることができたこと。

問7

本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

43

。

- ① 鉦山が崩れたとき、みな役夫は死んだと思ったが、妻子だけは信じなかった。
- ② 妻子は夫の死に際し、物心ついてからの人生の中で最も深い悲しみを感じた。
- ③ 観音の力によって、鉦山の出入り口に、一人の人間が入れるだけの隙間が開いた。
- ④ 役夫は葛を編み上げて籠を作り、それに乗って山人に引き上げてもらった。
- ⑤ 役夫の話を聞いた国の司は、高僧の力を借り、役夫に誓いを果たさせた。

問8

『日本霊異記』と同じ仏教説話集を、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

44

。

- ① 奥の細道
- ② 大鏡
- ③ 日本永代蔵
- ④ 発心集
- ⑤ 十訓抄